東京・葛西城址（かさいじょう）

1　所在地　東京都葛飾区青戸七丁目

2　調査期間　一　一九八六年（昭61）五月～一九八七年四月、
　　二　一九八七年五月～一〇月

3　発掘機関　葛西城址調査会

4　調査担当者　谷口　榮

5　遺跡の種類　城館跡

6　遺跡の年代　中世～近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

葛西城址は、中川右岸の自然堤防上に立地する中世の城館跡である。近世には徳川将軍家の御殿（青戸御殿）として使用されている。

調査は下水道の敷設に伴って実施された。葛西城址の中心を南北に貫く環状七号線を挟んで、東側が下水道東地区、西側が下水道西地区である。トレンチ状の調査ではあったが、堀や溝などの葛西城関連の遺構が確認され、城の縄張りを把握する上で重要なデータが得られた。

（東京東北部）

下水道西地区では、U区からW区にかけての五号遺構から木簡一点が出土した。五号遺構は、主郭北側の郭の西側に位置する堀である。遺構の時期はおよそ一六世紀と思われる。

下水道東地区では、M区二八号遺構から将棋の駒（二(1)）、I区三一号遺構から卒塔婆（二(2)）と板材（二(3)）が出土した。葛西城の主郭は周囲が堀で囲まれており、M区二八号遺構はその東側に位置する堀である。この堀は一六世紀に整備され、一七世紀の青戸御殿の時期まで機能していたとみられる。I区三一号遺構は、主郭東北側に所在する幅四m程度と推測される溝である。出土遺物は、中世と近世のものが混在しており、一六世紀の葛西城の時代に掘られたものが、一七世紀以降も溝として使われていた可能性がある。

8　木簡の釈文・内容

一　下水道西地区

(1)　「V□大□」　83×26×7　032

三文字が確認できるが、判読できるのは二文字目のみである。

一(1)

二　下水道東地区

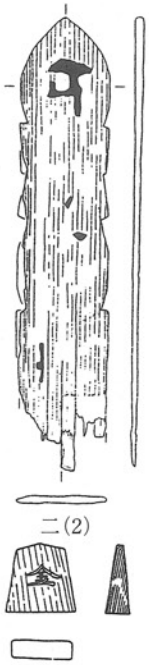
M区二八号遺構

(1)　「金」　30×30×3　061

I区三一号遺構

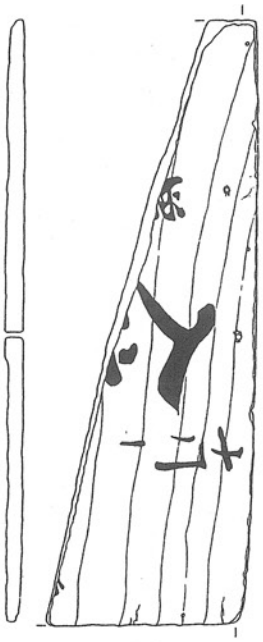
(2)　「□□□」　(213)×39×6　061

(3)　「○○十月
□入□□
□」　(87)×274×3　065



二(2)

二(1)



二(3)

(1)は将棋の駒、(2)は卒塔婆である。(3)は用途不明の板材で、釘孔を有する。

9　関係文献

葛飾区遺跡調査会『葛西城Ⅲ（第二分冊）』（葛飾区遺跡調査会調査報告五、一九九二年）

（永越信吾〈葛飾区教育委員会〉）

『木簡研究』のデータの奈良文化財研究所「木簡データベース」への提供

木簡学会では、会誌『木簡研究』に掲載した全国出土の木簡のデータを、各調査機関のご理解とご協力を得て、奈良文化財研究所の「木簡データベース」に提供して広く一般に公開している。「木簡データベース」が日本の木簡の総合的なデータベースとして機能し得るのは、この木簡学会の情報提供によるところが大きい。まさに会則にうたわれた本会の設置目的に適う事業といえよう。なお、情報提供は「木簡データベース」のフォーマットに載る部分のみであり、また写真や実測図の提供は現在のところ行なっていない。

「木簡データベース」の更新は、一・四・七・一〇月の最終月曜を定例としているが、『木簡研究』最終号のデータの登載は、概ね刊行翌年の一〇月の更新時を目途としている。